中日新聞を読んで

“深く問う”夏を

上野　征洋

二十万人が犠牲になった沖縄戦。約三千人と四万戸が焼き尽くされた浜松と静岡への空襲。ともに七十八年前の六月である。

沖縄全戦没者追悼式で玉城デニー知事は県民や遺族を前に切々と基地問題の解決と恒久平和の確立を語りかけた。他方、岸田文雄首相はほぼ昨年同様の官僚の作文を読み上げた。辺野古移設に難色を示す知事への当てつけに沖縄振興予算を大幅に削減した首相が「基地負担の軽減に全力で取り組む」（二十四日朝刊）とはしらじらしい。慰霊の言葉にも不相応だ。高校生の平安名秋さんが朗読した「平和の詩」の「おばぁの涙」をどう聞いたのだろうか。

「焼夷弾とかB29とか筆で書いて読んであげるの。今の子どもは知らない言葉だから」（十八日朝刊）と、浜松大空襲の語り部を続ける九十一歳の服部文枝さん。その慰霊祭では高校生に混じって献花するウクライナからの避難者ヴィーラさんの姿があった。「美しい浜松が戦火に焼かれたことを想像しただけで胸が苦しくなる」（十九日朝刊）と若者たちは時空を超えて戦争の痛ましさを共有する。浜松市は戦争の惨禍や復興を語り継ぐ「次世代の語り部」の育成に本腰を入れるという。戦争体験者も少なくなり遅きに失した感はあるがまだ間に合う。「戦争は醜く、むごたらしい」（二十日夕刊）、わずか十五歳で沖縄戦に動員され、仲間の多くを失った濱崎清昌さんは語る。こうした証言の聞き取りも急いでほしい。

安田菜津紀さんによる「ある在日韓国人被爆者の『伝言』」（七日夕刊）で昨年の平和記念式典でメッセージ映像の重要な文言が広島市によって削られていたことを知った。「差別や搾取の過去を覆ったままの『未来志向』は成り立たない」（同）との言説に広島と沖縄が重なり合う。「今や我々の多くは何かを深く問うこと、考えること自体を諦め、放棄しつつあるのではないか」（二十一日夕刊）と「大波小波」も自省する。戦火にせよ、差別にせよ、政治でも、大切なのは私たちが意味を問いつづけることだろう。言葉をかみしめる慰霊の夏である。

（静岡文化芸術大名誉教授）

2023年7月2日
中日新聞（朝刊）p.5